

MATSURISTA!

マツリスタ

Japanese Festival Supporters Magazine 日本の祭り応援マガジン

vol.02

2012 秋号

祭り人、語る

西田昌代氏

公益社団法人

全日本郷土芸能協会職員



連載も充実！

わたしの地狂言雑記

楽器に注目 民俗芸能

21世紀の奇祭セルフ祭

おまつりへ行こう！

熊野地方と祭り

郷土芸能に魅せられて、江戸のお囃子に挑戦中！

MATSURISTA!

02

2012 秋号

04 **神楽絵** 栗田知佳

10 **祭人、語る** 公益社団法人全日本郷土芸能協会 **西田昌代**氏

ロングインタビュー「**郷土芸能**に魅せられて、**江戸のお囃子**に挑戦中！」

26 **楽器に注目！民俗芸能 第二回 締め太鼓** 編 新美優

38 **★新連載★おまつり**へ行くぞ！ 其の一 宮本幸雄

42 **熊野** 地方と祭り（2）**山の盆踊り** 編その2 大竹雅子

50 わたしの**地狂言雑記**（二） 館野太郎

57 【体験レポート】**鹿踊ワークショップ@東京** 西嶋遥

62 **★新連載★21世紀の奇祭 セルフ祭**〈1〉 池田義文

68 **民俗芸能なう！** ep.02 「東日本大震災と民俗芸能」 西嶋一泰

【MATURISTA】〔祭り + ista (伊 ~ なる)〕

祭り好きで好きでしようがない祭りに関わる人びと。

祭りを担う人、支える人、観る人。そのすべてがマツリスタ。



『敬神愛国-けいしんあいこく』

恵比寿様が大黒様のお屋敷を訪ねる、めでたいお話。

従者達のおかしなやりとりが見どころ。

西田昌代氏

公益社団法人 全日本郷土芸能協会職員

戸塚囃子保存会会員

聞き手 西嶋一泰（マツリスタ編集部）

郷土芸能に
魅せられて…江戸のお囃子に
挑戦中！

祭りが好きで好きでしようがない、芸能に骨の髄までどっぷりハマりこんでしまった、現代の祭り好きたち。本誌ではそんな人びとを、「祭り人（マツリスタ）」と名づけ、毎号のインタビューを通して、その生態に迫っていきこうと思います。

今回は前回の小岩秀太郎氏に引き続き、公益社団法人全日本郷土芸能協会の職員でもある西田昌代さんにインタビューをしてみました。今ではすっかり祭り・芸能好きな西田さんですが、はたしてどんなきっかけでハマりこんでいったのか、詳しく聞いていきます。

西嶋 西田さんが祭りが好きになっただけはなんですか？

西田 祭りは、父方のおじいちゃんが好きだったんですよ。祖父父母は岐阜の大学と垂井の出身なんですけど、垂井だと曳山とかがあるんですけど、多分それも観てたし、歌舞伎とかも好きだったみたいです。父方は岐阜の、花火職人の家で。公私共に祭りの場にいるんだらうなと（笑）。戦争の後に四谷のほうに引っ越してきたんですけど、最初に小さい道具屋さんを始めたんですよね。それで祖父父母が一生懸命働いて、その後家具屋さんをはじめ、店を大きくしてくれたんですけど、やっぱりお祭り好きなんです。地域のことに関わりたいうて言うタイプで。

西嶋 たえ場所が変わっても…。

西田 やっぱり、地域の色んな役とかをやりたがる。町内会長になって、お祭りに力を入れる！みたいな、小さい時から、「お祭り行こう」「あ、うん」という感じで、それがきっかけというのか、そういう流れですね。

西嶋 西田さんは小さい時から四谷

親子三代、祭り好き

に？

西田 四谷です。

西嶋 具体的には四谷のどうい
うお祭りに？

西田 須賀神社の祭礼です。お
神輿があつて、それが氏子の所
を巡行していくつていうお祭り
を6月にやっています。

うちのおじいちゃんが、「祭り
委員長」をやつてた時期もあつ
て。その頃は、祭りシーズンと
かになると、いつも家にいない
んです。どこにいるんだつて探
したら四谷3丁目の神酒所にい
る。

おじいちゃんに会いに行く
と、中で笑つてたりするんです。
神酒所つてこういう竹、一本
渡してあつて入りづらんです
よね（以下写真参照）。日常つて、
あまりエリアで分けられてない
じゃないですか。入っちゃいけ

ない場所があるつていうことを

一番最初に知つたのがこういう
場所だつたように思います。「入
つていい？」てじいちゃんに聞
いたので。普通だつたらボンと

入るんですけど、やつぱりこう
いうものがあることによつて、
入っちゃいけない場所がある、
地域が大切にしているものがあ
るつていうのを、感じたんだと
思います。

「入っちゃいけない」つて思
う自分がなんなんだろう、みた
いな。

西嶋 普通のところとは違つて
いうのがなんとなく…。

西田 地域が大切にしているも
のがここに詰まつてるわけじゃ
ないですか。誰でも入れるわけ
ではないところ。いつも家にい
るおじいちゃんが、「向こう側」
にいるつていうことに対してや



西田さんの祖父。神酒所前にて。

※神酒所 祭り期間中、神様にお酒を奉納する小屋。
神輿を一時的に安置したり、花（お祝い金）を受け付
けたりと祭りの拠点となる。

つぱり：今は本当に向こう（あ
の世）に居るんだけど（笑）。つて
いうのがまあ、原体験としてあ
りました。

お神輿は巡行してくるんです
けど、ところどころ休憩するじ
やないですか。うちも神輿の休
憩場所になつてたんです。新宿
通り沿いで家具屋をやつてたん
ですけど、キュウリとか、ケン

タッキーとかビールを店先で振
舞つてたんですね。そういうの
をやつてたのも、「お祭り楽し
い」つていう想いに結びついて
いったんだと思います。

体がうずいてしょうがない

お神輿を父親とか叔父さんが
担いでくるわけですよ。うちの



お店に差しかかると町内の人が、神輿の花棒つてあるじゃないですか。お神輿の一番先っぽのところを、父と伯父で担がせてくれようとするんですよ。「お前たち入れ」って。そういうのがあったりして。それを神酒所帰りのおじいちゃんが、店の前で杖ついて座りながら見てるんですね、「祭り委員長」の名札をつけて悠然とね。それが何か結構かっこいいなと思って。

「おお、来たか」みたいな感じで、すっごい嬉しそうでした。大好きだったんですよ。勝手に入って神輿支えてたり（編集部注…写真左）。体がうずいてしょうがないんでしょうかね。

西嶋 いい笑顔だなー。
西田 ニニコニコですもんね。そのおじいちゃんが店にいて。前では父と叔父が神輿担いで、母と叔母が

横で振る舞いとかをしているっていう、3世代が揃う場だったんですよ。私たち兄弟は神輿の周りではしゃいで。それは、すっごい幸せな事だな、と。お祭りは地域のつながりがあって、色んなものが集ってくる場っていうのを、お祭りのときに知ったというか、そういうものなんだなって。

西嶋 毎年毎年のことで、いつも楽しみにしてるみたいな感じでした？

西田 そうですね、小さい頃から楽しみにしてて、神輿が来る

時間までには必ず帰るという感じでした。町の中ってお祭りシーンになるとお囃子の音が流れ始めるんですけど、それが聞こえると「ああ来たあ…来たあ…」って思ってた。学生時代はそんな感じ。音が来た、祭りシーズンが来たって。

西嶋 割と最近もそんな感じですよ。
西田 そうですね笑。そういう遺伝…：遺伝子なんですかね？

お祭りセンサー



締め太鼓 編

新美優

夏もあつという間に過ぎて、風も涼しいです。すっかり秋な、この頃ですね。さて、皆さんどこかのお祭りには行かれましたか？夏祭りのたくさんある日本。創刊号の僕の記事を見て、夏祭りで民俗芸能に出会った際に、使っている太鼓が何かなあ、とマニアックにのぞいて楽しんでいただけたらうれしい限りです。えっ「そんなマニアな奴はいないよ」って？そうですか。ではまだまだ

洗脳が足りませんなあ……。ふっふっふ笑。というわけで、これからも楽器のデイブな話が続きますので、皆様覚悟のほどを。

今回のテーマは「締め太鼓」です。前回は比較的バラエティーの少ない「鉦留め太鼓」であれだけ書いたのですが、それ以上に細分化、多彩なものが締め太鼓にはあるので、恐ろしい世界です。それだけ日本人にとって打楽器、特に「太鼓」というのは重要で、身近な楽器ということなのでしょう。

今回の記事も、前回同様、参考文献として吉川英史監修(1992年)『図説日本の楽器』東京書籍に書かれた、小島美子さんが執筆した「民俗音楽の太鼓・つづみ類」の記事をもとにしています。さらに知りたいと思われる方は、この本を参考にされるというでしょう。図説なので、写真も多く見やすいです。

「締め太鼓」とは？

前回の「鉦留め太鼓」は、皮を鉦で留めるタイプの太鼓の総称でした。それに対して、「締め太鼓」は皮を張る際に、皮の縁に紐を通し、それを締め上げて皮を張るタイプの太鼓のことをいいます。このタイプの太鼓は「ずいぶん」と古いらしく、なんと古墳時代の埴輪にも、締め太鼓を叩く人物が見られます。写真で見ると、壺とかビア樽のような真ん中が膨らんだ胴体の太鼓のようです。左手に持った埴輪で叩いているようにも見えますが、何か皮面に載つてるなあ、という程度の埴の造形です。太鼓の胴体には紐絞めの表現なのか、上半分にそれらしき三角形を組んだような線彫りの模様もしっかりあります。こういうのを見たときに「どういう音楽やってたんだろなあ」といろいろ妄想が膨らむものです。

「この埴輪の持つている太鼓が、そのまま今の日本の「締め太鼓」につながっているとは思いませんが、太鼓の皮を「紐で締め上げる」発想というのは、ずいぶん古く、また世界各地にもあることから、かなり普遍的なものであることは間違いないようです。前回紹介した「鉦留め太鼓」が、基本的に漢字文化圏の地域に限って分布するのはずいぶん対照的です。

「能太鼓」の謎

いわゆる締め太鼓というと、皆さんは平たくて比較的小さい太鼓を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか？いわゆるお能(能楽)で使われる能太鼓(のうたいこ)というものです。斜めにかける台に載せ、両手に持った埴で上から叩きます。このタイプのものは実際に民俗芸能でもたくさん使われていますし、この「能太鼓」をもとにして、ご当地でそれぞれに

進化した太鼓もあるので、そういう「発展型」も含めるとものすごい数の芸能に使われていることでしょう。この太鼓の形を頭に入れておくと、いろいろな締め太鼓を見るとときにも比較できるの、なにかと便利です。ちなみに、僕が習っている「熱田神楽」「宮流神楽」もこの太鼓を使います。愛知でも山車のお囃子など、わりと頻繁に民俗芸能にみられる太鼓です。

割とポピュラーなイメージがあるこの太鼓ですが、実は来歴に



能太鼓。割と目にすることも多いタイプの締め太鼓。
実は今の形になるまで「すりつづみ」の変遷があったようです……。

謎が多い楽器なのです。まず、中国にはこういう打ち方をするこの形の太鼓が歴史上ないので。ということは、中国からの直輸入の太鼓ではなく、「日本オリジナル」の太鼓であるようなのです。その説明を少ししたいと思いますので、皆さんしばらくお待ちください。

この太鼓の「先祖さん自体は、中国伝来のものと考えられ、実は棒を使わずに演奏されていたと考えられています。要するに手を使っていたのですが、この使い方がまた何とも奇妙。なんと手で直接「擦ったり」、「はじいたり」(デコピンみたいに?)で音を出していたそうなんです。その名も「揩鼓」とか「摺鼓」と書いて「かいこ」とか「すりつづみ」と呼んでいたようです。太鼓を「擦る」とどんな音がしたのでしょうか?あまり大きな音は期待できないような気がしますね。わりと静かな音楽に使われたのでしょうか?

ちなみに、「この「揩鼓」現在は残っておりませんが、中国の唐の時代の壁画にも見られ、さらにNHK大河の「平清盛」にも出てくる、藤原信西にゆかりがある(かもしれない?)『信西古楽図』という絵巻にも出てきますので、中国から日本へかなり古い時代に日本に来ていたのは事実のようです。

さて、「こ」からがこの太鼓の面白いところです。こすって音を出す太鼓はいかにして棒でたたか

れるようになったのか?この疑問に対して、『図説』のなかで小島美子さんは、次のように民俗芸能での太鼓の使われ方から推測されています。

まず、福井県武生市にある「野大坪万歳」という芸能があります。「万歳」という芸能は、一般的なイメージでは、正月に二人組が鼓と扇子を持つて家々を回り、祝福の言葉や芸をやりな



「揩鼓」信西古楽図より。新美が書き写した図。古楽図に出てくるおんさんがとてもかわいいのです(笑)。

MATSURISTA! 投稿募集

あなたの 祭りに対する想いを 教えてください

あなたの祭りに対する熱い想いを記事にしてみませんか？
『MATSURISTA!』では、みなさまからの投稿を募集しています。

募集要項

- ・コラム、レポート、論考など形式は自由。
- ・字数は2,000字～20,000字程度（応相談）。
- ・写真やイラストも掲載可。多めを推奨。
- ・〆切は夏号は5月末、秋号は8月末、冬号は11月末、春号は3月末。
- ・形式はword,textなど。レイアウトは基本的に、編集部で行います。
- ・投稿される場合は〆切2週間前に下記メールアドレスに
タイトルと簡単な概要をお知らせください。
- ・文章に自信が無い方はアンケート形式の電話やメール取材にも対応しています。
ぜひあなたのまちの祭りをご紹介ください。

■特典

『MATSURISTA!』2部

『MATSURISTA!』オリジナルピンバッジ

■お問い合わせ

maturista@gmail.com

質問・投稿・雑誌についてなど気軽にどうぞ

雑誌や記事についてのご感想も受け付けています。ぜひご連絡を！

おまつりへ行こう!!!

其の一

皆さん行こうよ、おまつりへ！
まずは調べてみよう

宮本 幸雄

おまつり

「ええかあ！？」行くどおー行けえー！！！！」「チンキチンチンキチン！」「トンコトンコトンコトン！」「そおりやあ、そおりやあ！」「ほいつさあ、ほいつさあ！……筆者は、大阪は岸和田の生まれ育ちであります。勇壮かつ絢爛豪華なだんじり、テンポ良い鳴り物の音、曳き手の汗したたる格好いい姿……岸和田だんじり祭りは、担い手にとつても、見物人にとつても、何が何でも魂揺さぶられる、勇壮かつアツイ

「おまつり」なのです。小さい頃から現在に至るまで、「岸和田だんじり祭」が近づくくと、ソワソワワクワクしてしまいます。

読者の皆様も、「おまつり」を通じて、「面白い」「楽しい」「感動」……色々な心にさせられた経験がおありでしょうか。

私のおまつり体験は、先述の「岸和田だんじり祭」に始まり、京都での学生時代、まだ民俗芸能を知らなかった考古学研究室での春4月、研究の展望が開けず燻っていた時のことでした。その時、私の師匠である指導教官から、「京都には沢山の文化財、伝統文化があるのだよ。それを見ないでどうする。学問は、本や論文だけじゃやないのだよ、現場を「見て」「体験」してこそ、生きてくるものなのだ」と指導いただいた私は早速情報収集してその時期に「壬生狂言」が行われていることを知り、壬生寺へと赴きました。「カンカン、カンテンテン……」鉦の拍子だけで繰り広げられる無言劇(パントマイム)の面白さ、その

仕草の豊かさ、中近世を感じる面や衣装、風俗、そして私達へ語りかける仏の信仰の大切さ……狂言という無言劇を通して、私達に雄弁に語りかける民俗芸能の面白さと、

古いにしへの京の文化の豊かさを感じ取ることができたことに感動を覚えて、現場で「見て」「体験」することの大切さを身に染みて実感致しました。

その後社会人になり、もつと現場を「見て」「体験」して「記録」したい、そう思った私は、北は陸奥みちのく、南は琉球りゅうきゅうまで、あちこちの民俗芸能を探訪記録しました。宮崎県の「高千穂神楽」で、深夜延々と続く同じ舞に眠気を覚えずとも、温かいかつ酒(竹)に入れた焼酎の熱爛ねんらんがふるまわれて眠気を覚ましてくれたこと、ある大学に愛知県「奥三河の花祭」が出演している、「テーホトヘトーホーヘー」という奇妙な拍子と、怖い容顔で大きな鬼面の鬼様に圧倒されたこと、可憐な子供達の花の舞に見惚れた

こと、釜のお湯を遠慮なくかけられてびしょびしょになったこと……そのおまつりの奇妙かつ不思議さに惚れて、直ちに現地へ赴き、更に「奥三河の花祭」の面白さに惹かれて、以来10年間「花狂い」と言われるまでに通い続けていることなど、枚挙に暇ありません。

日常生活から、特別な時間へといざなわれる時間、それが「おまつり」なのです。さあさあ、皆さん行こうよ、おまつりへ！

本稿では、おまつりへいくためのイロハを、書いてまいりたいと思えます。たどたどしい文章では「ざいませ」が、何卒お付き合いくださいませ。

調べてみよう！

さて、思い立ったが吉日、早速おまつりへ出かけましょう！と、その前におまつりってどんな意味か、よく考えたことありますか？筆者も、辞書を引いて調べてみました。「まつり(祭り)」「神や祖先の霊

熊野地方と

祭り (二)

山の盆踊り編 その2

大竹雅子

この記事が出る頃にはもうすっかり秋祭シーズンだと思われませんが、夏の熊野は7月に熊野那智大社例大祭(扇会式例祭。通称・那智の火祭り)や古座の河内祭(船と獅子舞が登場します)等、各地で様々な祭が開催されました。こちらでは今号も熊野地方の盆踊りのお話の続きを書きたいと思います。

例年通り熊野地方各地でもこの夏、盆踊りが開催されました。

私の住む田辺市本宮町では今年18地区で開催。町の人のための素朴な行事ですが、ひとつの町でこれだけの数の盆踊りが開催されるのは踊りが好きな人が多いこともあるでしょうが、やはり初盆やご先祖様のご供養という生活の中の大事な行事だからなのでしょう。この時期の町内の河原には、ご先祖様をお送りするための精霊送りのお供え跡があちこちに残っています。

私はこの夏、8月14日に大瀬地区の大瀬の太鼓踊り、15日に本宮地区のハイヤーハー踊りに参加させていただき、合間にうかがえた地区としては10日に川湯温泉

の縁日で熊野本宮伝統芸能子ども教室による平治川の長刀踊り、13日と23日に伏拝地区(この地区の盆踊りは13日から15日までと23日に開催しています)、14日に発心門地区、15日に皆地区、土河屋地区の踊り、20日に串崎大師祭の宵宮で下湯川地区の踊りも拝見出来ました(各地の開催日時は年によって違う場合があります)。熊野本宮の近隣ではおとなり・奈良県十津川村でも盆踊りが盛んで、ホテル昴のイベントで各地区の踊りを拝見することが出来ました。

今年あらためて思ったことは、やはりこの地域での盆踊りはただ

踊るといふより(多くの地域でそうでしょうが)故人のご供養として行われるということでした。本宮町内では初盆を迎えた方の遺影を飾った祭壇に向かって踊る、という地区もいくつかあって、曲の合間に遺影にむかって祈りを捧げる地区もありました。今生きている人だけでこの世が出来ているわけではないこと、故人の御魂を尊重する土地の人達のやさしい気持ちが伝わってきます。

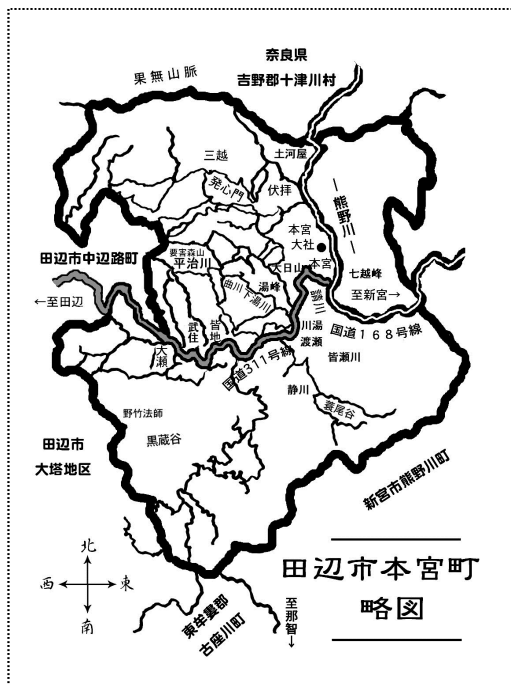
こういった生活の中の行事に素朴な芸能も多く残されているわけで、「芸能」というものがまるでテレビと呼ばれる四角い箱の中に映る出来事のようになっていた

のはいつからなのかわかりませんが、芸能は元々專業の芸能者だけのものではなくて、一般庶民が生活してゆく中で誰でも唄ったり踊ったり、喜びや悲しみや畏敬など生活感情を表す手段でもあって、庶民もそれぞれの暮らしの中で芸能を練り上げ伝えてきました。そしてそれが現在郷土芸能と呼ばれるものなのだと思います。

熊野川流域の盆踊りの特徴

熊野地方山間部、主に熊野川流域の盆踊りについて、まず熊野川という川がどこからどこまで流れているかという点、源流が奈良県吉野地方の大峰山脈にあり、そこ

から和歌山県新宮市の熊野灘まで続き、奈良県側では天川村から五條市まで「天ノ川」と呼ばれ、十津川村に入ると「十津川」と呼ばれ、和歌山県田辺市本宮町に入ると「熊野川(水系名・新宮川)」と呼ばれる複数の呼び名を持つ、全曲により扇子を畳んで打ちあわ



長183kmの長さを持つ第一級河川です。熊野川流域の盆踊りでは両手に扇子を持つことが多く、曲によって房のついた棒を持つ「木口踊り」になったりするのも特徴です(伏拝、発心門、萩地区等)。

曲の共通点としては踊りの最後の曲はその地区で最も有名な曲か「伊勢音頭」を踊る地区が多々あります。

こちらの盆踊りの本義は「供養ですが、踊りそのものは楽しく「踊ったってよー」とポードーレスに誘ってくれる所が多いので、昔の私だったら観る、撮るまででせいっぱいでしたが今は盆踊り経験値が多少上がったので、うかがっ

わたしの地狂言雑記(二)

舘野太朗

秋は地芝居シーズン

秋といえば、当然地芝居ですね。歳時記『図説俳句大歳時記』(角川書店)を引くと、仲秋(秋の真ん中)の季語として「地芝居」が収録されています。類語として、地狂言、村芝居、地歌舞伎、在芝居があげられています。

実際のところ、地芝居は秋に限らず1年を通して上演されています。春と秋が多くて、続いて冬、夏に行うところは少ないです。夏の地芝居は、室内や夜ならまだましですが、真夏に役者のこしらえをしてると倒れちゃうんじゃないかと心

配になりますし、冬に雪が降りしきるなか上演される地芝居(黒森歌舞伎)も風情がありますが、観るほうにはなかなかの気合が要求されます。

春や秋に地芝居が多いのは、昔の農作業のスケジュールや祭りの都合が関係しているようです。地芝居が、秋の季語となつているのは、秋の風景と地芝居が似つかわしいと俳人たちが感じてきたからではないでしょうか。この秋は地芝居を見物して、一句ひねってみるのも一興ではないでしょうか。高浜虚子の弟子、富安風生はこんな句を残して

います。

地芝居のお軽に用や楽屋口

「お軽」とは、『忠臣蔵』のヒロインのお軽さんのことでしょう。地芝居は土地のしろうとが演じていますから、舞台ではお軽さんでも、普段は近所のおにいさんだったり、おじさんだったりするわけです。地芝居の楽屋はおにいさんやおじさんからヒーローやヒロインに変身する場所というわけです。楽屋に着目して、普通の人が一日だけ変身する地芝居のおもしろさをよく捉えた句だとも思います。

おすすめ地芝居エリア「神奈川県」

さて、連載第2回は、はじめて地芝居に出かけてみようというかたにおすすめ地芝居を紹介します。まずは、僕のおすすめは「神奈川県」の地芝居です。現在、神奈川県内には、相模原市の藤野歌舞伎、海老名市の大谷歌舞伎、横浜

市市区のいずみ歌舞伎、座間市の入谷歌舞伎、秦野市の目久尻歌舞伎と、地芝居の団体がらつ活動しています。

僕が神奈川県をおすすめするのは、地元だからというのもありますが、どの地芝居も比較的交通の便のよいところで公演をおこなっており、首都圏からであれば余裕で日帰りが可能だからです。「ちょっと見物に行ってみようか」くらいの人にはうってつけです。神奈川県地芝居情報は都会に近すぎるせいか、地芝居見物のガイドブックにもほとんど掲載されていません。でも、神奈川県つてなかなかの地芝居王国なんですよ。

神奈川県で具体的にいつから地芝居が行われるようになったかははつきりとはわかりません。少なくとも、江戸時代の後期、1800年ごろにはすでに祭礼で地域の住民たちが芝居を行っていたことが各地域に残された文書などから伺えます。

江戸時代の末期からはプロの劇

団が結成され、県内外の祭礼を中心に興行をしまわりました。祭礼芝居は神楽師が興行を取り仕切ったり、ときには歌舞伎の役者を兼ねていました。神楽師から役者に転身する人もいたそうです。

県下でよく知られた役者には、市川花十郎・市川柿之助、三柵源五郎などがいます。また、この頃の役者たちは、自分が芝居に出演するかたわらで、しろうとに芝居を教えるということもしていました。

プロの劇団は1970年代まで活躍したそうですが、この頃になるとふたたび素人による芝居が民俗芸能として注目されるようになり、藤野歌舞伎の前身である篠原カブキが1965年に神奈川県民俗芸能大会に出演したのをきっかけに、県下では地芝居の保存会が結成されたり文化財指定が進みましました。1990年代にはいると、ふたたび地芝居復活ブームが起り、新団体が結成されたり、既存の団体の活動が活発化し、前述の5団体が出揃います。2002年

からは、毎年春に横浜で県内外の地芝居が競演する催し「かながわの地芝居」が開かれています。

神奈川地芝居さんまい

「かながわの地芝居」で、各団体の公演はほとんど観たことがあったのですが、それぞれの地元ではどのような様子で芝居が行われているのか一度観てみたいと思い、2011年の秋から冬にかけて行われた4団体の公演をめぐってみました（秦野市の目久尻歌舞伎だけは観ることができませんでした。残念）。地芝居めぐりをしてみて、各地の個性の豊かさにあためて気づきました。公演の日程にそって、各団体の芝居の様子と特徴を紹介していきます。

1. 藤野歌舞伎

新宿から中央線に乗って1時間ちよつとゆられると藤野という駅に着きます。藤野町（現在は相模



藤野歌舞伎『太功記十段目尼ヶ崎の段』

21世紀の奇祭 セルフ祭〈1〉



池田 義文

大阪で、何が：

みなさんこんにちは、そして初めまして。大阪で新しい21世紀の奇祭「セルフ祭」を興そうと奮闘している池田社長といたします(本当に社長ではなくあだ名です)。この原稿を読んでいる方にはきつとセルフ祭ってなんだ!?! という人も多いと思うので、簡単に説明すると、年齢

も性別も職業も世代も超えて、一般人もアーティストも何の垣根もなく、奇人変人凡人それぞれが自分の表現を自由に出来る場、自分の作品を自由に発表出来る場。それがセルフ祭。

そもそも何故祭りが必要だと考えたかという、祭りには年齢性別、世代、職業を越えた様々な人種の人たちが一同に集うことが出来る不思議な力があるから。そし

て、そこには自然とコミュニケーションが生まれる。古くから祭りの日には、塔や火を囲んで円を描き、階級や性別の異なる人たちが同じリズムで踊る。そこでは、死者を吊つたり、自然の恵に感謝したり、今自分たちが生きていることに感謝をする。僕らは今の時代そんな誰もが平等に集まれる場所が必要だと考えて、セルフ祭を興している。

シャッター商店街からの胎動

第一回のセルフ祭を開催したのは2012年5月25〜27日の3日間。大阪通天閣の真下、いわゆる新世界と呼ばれる地域にある「新世界市場」という商店街。この商店

街は半数以上が閉店しているシャッター商店街。そもそもなぜこの場所ですセルフ祭を開催することになったのかというと、コタケマンという絵描きのアーティストからこの場所を使って何かイベントをしないかと持ちかけられたのがきっかけだった。このコタケマンという男は、4階建ての一軒家をまるまる絵画作品にしてしまった変な男。その家が名付けて「セルフ屋敷」。そこからとりあえず「セルフ祭」でいいだろうというところで、始めたのがセルフ祭。ところがその「セルフ」という言葉が一人歩きしてどんどん意味をもつていくことに。今では「自分のことは、自分でやる」「あらゆる人が表現者になれる場所を作る」、それを「セル

フ」という言葉に置き換え、名前はセルフ祭となったという事になっている。

第一回目のセルフ祭では、過疎化した商店街とにかく人を集める事が目的だった。セルフ祭のメンバーはまず何年も掃除をせず猫の匂いで充滿していた市場を何日間も

かけ大掃除。更に何年もシャツタ―が開いていなかった店舗も掃除した。そして、そのことで結果的に、たくさん空きスペースを使わせてもらうことになった。最初は地元の人たちも外から若者がやってきての「アートで町おこし」を何度も経験して、一過性の盛り上がりで終わる事になっているのか、なかなか心を開いてくれなかつたように見え

たけれど、祭りの準備をしていると近所のお店の人たちが飲み物やお菓子の差し入れをしてくれたり、

遊びに来た子どもたちの世話を近所のおばあちゃんがしてくるなど、人情に溢れるとても優しい人たちばかりだった。

お祭り当日の3日間ほとんかく人を集めるために、新世界一帯を変な格好で大仮装パレード!! (後々解つたことだけれど、偶然にも50年前にも新世界市場を盛り上げるために、市場の店主が中心となり仮装パレードを行つていたという)。そして、商店街の空きスペースを使用して、関西を中心にものづくりや表現活動をするアーティストの表現の場をつくつた。結果、



執筆者プロフィール

■新美優(にいみ ゆう)

1984年生まれ。愛知県出身。知立神社神楽保存会会員。大学時代の卒業論で「神楽」を題材にして調べてるうちに、神楽の笛太鼓の伝承者になってしまったという変な経歴の持ち主。軽い気持ちで始めるうちに、どんどんと深みにはまり、今では他県にまで他の祭りや芸能を見に行くのが生活の一部となっている。現在興味のあることは、日本国内の民俗芸能の笛のこと。愛知県内のお囃子についても、見に行きたい場所がたくさんある。現在、絶賛調査中。お囃子あればどこへでも。

■大竹雅子(おおたけ まさこ)

横浜から当時林業に従事していた熊野の夫のところへ嫁ぎ 17 年目。民俗芸能 STREAM のラジオでは時々「熊野のあの人」と呼ばれています。現在夫婦で熊野地域の情報サイト「み熊野ねっと」運営中。<http://www.mikumano.net/> サイト内で「おさんぽフォトアルバム」という熊野地方のお祭りを取り上げたコーナーを担当。これからはばらばら熊野と芸能について書いてゆきたいと思います。現在熊野古道の語り部をしながら無形文化財の盆踊り「平治川の長刀踊り」「大瀬の太鼓踊り」「ハイヤーハー踊り(熊野本宮踊り)」と熊野本宮大社のお神楽に参加中。

■館野太郎(たかの たろう)

昭和 60(1985)年千葉市美浜区生まれ、横浜市泉区そだち。中学高校時代に、地芝居に出演していました。つくば市での 8 年間の大学生活を経て、ことしからふたたび泉区在住。芝居研究者、ギタリスト休業中、しろうと役者活動再開。地芝居ポータル(<http://www.jishibaiportal.com/>)スタッフです。

■宮本幸雄(みやもと ゆきお)

昭和 49(1974)年大阪・岸和田生まれの岸和田育ち。全日本郷土芸能協会会員。「民俗芸能記録写真撮影者」であり、「放浪癖のある神楽馬鹿」。岩手県の早池峰嶽流石鳩岡神楽・宮城県の雄勝法印神楽・岩手県から宮城県の南部神楽・愛知県奥三河の花祭等中心に民俗芸能をこよなく愛する風来坊。「日本の

おまつり探訪」というブログを立ち上げ、探訪したおまつりを紹介している。
<http://dankichi0423.blog.fc2.com/>

■池田義文(いけだ よしふみ)

(池田社長)セルフ祭代表、ミュージシャン、DJ、ライター、録音エンジニア、肉体労働者。入場料、アーティストの出演料が「野菜」のイベント、「ギブミー・ベジタブル」主宰。入場料として持って来た野菜はその場で、料理人が調理し無料で提供する。2011年3月11日に起こった東日本大震災を受け、被災地の方々に、食の提供、こどもの心身サポート、地元 工芸品などの制作販売支援などの活動を目的に「まんまる」を設立する。ブックキング、講演何でも→080-6642-1483
tripxtrip@gmail.com

■西嶋遥(にしじま はるか)

昭和 58(1983)年東京都三鷹市生まれ。夫の一泰にくっついてあちこちの祭に出かけては、各地の「マツリスタ」たちとの出会いに衝撃を受けています。ある意味祭や芸能以上に彼らの存在が興味深い今日この頃。

■西嶋一泰(にしじま かずひろ)

1985年大分生まれ、東京育ち。立命館大学大学院先端総合学術研究科大学院生。日本学術振興会特別研究員。民俗芸能 STREAM 代表。各地の祭りを飛び回りながら、マツリスタをつないでいく活動を展開中。

【編集後記】マツリスタをお買い上げいただきありがとうございます。今回は執筆者もページ数も増えて編集も大変で若干売日伸びてしまいましたが(笑)、読み応え充分です！感想やレビューなどもいただくと励みになるのでよろしければ(一泰)

MATSURISTA! Vol.2 2012 年秋号

2012 年 10 月 1 日発行

編集・発行 マツリスタ(代表:西嶋遥)

Email matsurista@gmail.com

URL <http://matsurista.blogspot.jp/>

印刷所 (株)ポプルス

<http://www.inv.co.jp/~pops/>

電子書籍 ブクログのパワー

<http://p.booklog.jp/>

祭りにつながる故郷の新しいかたち



ウェブ・動画・ラジオ・雑誌で日本の民俗芸能や和太鼓の情報を発信するプロジェクト

民俗芸能STREAM <http://minzokugeinostream.seesaa.net/>

あなたのまちの祭りや芸能の情報を募集中

MATSURISTA! vol.2 2012秋号

2012年10月1日発行

定価：500円

企画・編集・発行 マツリスタ

<http://matsurista.blogspot.jp>